

仏教的と非仏教的：今日平家物語をどう読むべきか の問題に関連して

井手，恒雄
福岡女子大学教授

<https://doi.org/10.15017/12381>

出版情報：語文研究. 3, pp. 16-22, 1955-11-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

仏教的と非仏教的

二六

— 今日平家物語をどう読むべきかの問題に関連して —

井 手 恒 雄

一

たとえば「祇王」（巻第一）とか、「横笛」（巻第十）とかいうものをどう見るかという、具体的な問題を手がかりに、今日平家物語をどう読むべきかの課題について、私見をまとめてみたいと思う。

今日平家物語をどう読むべきかといつても、それはもちろんこの作品が本来客観的にどのようなものであつたかということと、離して考えられるものではない。むしろわれわれの認識がどうであろうと、平家物語には平家物語の面目があらうというものである。しかも実際には、人によつて同じ平家物語の受けとり方がどうも違うものかと思わせられることがあり、その受けとり方の違いを検討し調節することによつて、はじめて平家物語そのものの正しい姿を捉

えることもできるのではないかと考えられるふしがある。その受けとり方についていうと、それは各人各様というのではない。いつてみれば、二つの全く対立する見方があり、両者は容易に相譲らぬ関係にあるものようである。具体的な例について、その間の事情を明らかにしたいと思うのである。

二

「祇王」といえば、いうまでもなく祇王が清入盛道の寵を失い、母と妹とを伴ない嵯峨の山里に世を遁れて念仏を唱え、のちにはかつての敵手仏の参加を得て諸共に仏道にはげみ、遅速こそありけれ四人とも往生の素懐をとげたといい、世にも哀れな話である。これは、その内容が格別問題にされねばならぬほどのものではないようである。いつ

てみればそれは一人の白拍子が、当時の最高権力者から無惨にもうち棄てられ、その非道な仕打ちに対して、積極的に反抗して自己の権利を主張する術も知らず、消極的にわが身を隠し、仏道に最後の安住の地を見出だした、それも当時の女性としては精一杯のことであつた、といふのである。ところが、それをそう見ない人もある。

ある論者は、祇王を例の「小督」（巻第六）の女主人公小督と比較して、祇王は、小督が消極的な女性であるのに対して、甚だ積極的な女性であるという。すなわち、祇王は清盛入道に愛され、小督は高倉天皇の君寵を辱うした。祇王は寵衰えて嵯峨の山里に人の心の秋を恨み、小督は飽かぬ別れを惜しみ奉つて、心ならずも洛西の草庵に行いました。前者は、後者が運命に泣いて生涯を空しく朽ち果てた、所詮は王朝時代の旧女性にすぎなかつたのと異なり、積極的にわが運命を開拓し、信仰に生活の意義を見出だして甦つたところの、新時代のめざめた女性であつたといふ。

こういう見方はどうであらうか。

私は、ある機会に人の意見をきくことができたが、こういう見方は今日案外多くの人々に、そのまま受け入れられるもののであつた。

その中のある人は、祇王は当時の大権力者である清盛入

道の前をも憚らず、その掌中の珠である仏御前への面当てのように、毅然として「仏も昔は凡夫なり」と言つてのけた、そこに新時代の女らしさがあるといひ、ある人は、祇王は最初のうちこそ涙に明け暮れたが、これが運命だと悟つてからは、積極的に自己の将来を開拓し、信仰に生きてのだから、たしかに目ざめた人であつたといひ、またある人は、祇王が信仰に新生活の意義を見出だし雄々しく生きて行つたというのも、当時仏教思想が盛んになつて来たため、女性が前時代のそれに比べてはるかに自立力のあるものになつて来たためである、といつた。

私は最初にのべた自分の見方とこれらの考えとの間に、少からぬずれのあることに気づく。これらの考え方にはどこか誤りがあり、それは従来の平家物語観の根底にあつた大きな錯誤が、思いがけず正体をあらわしたものであるように思われるのである。

もちろん反対の意見をのべる人もあつた。

すなわちある人は、小督が全く自分の意志というものを持たぬかよわい女性であることは確かであるが、だからといつて祇王が強い女性だとはいえない、清盛入道の面前で「仏も昔は……」とうたつたところは、まだしも元気がよいようであるが、彼女とても最後は諦めて仏道に入つてしまつたのだから、といひ、またある人は、祇王は自ら発心

して仏道に入つたとはいへ、その氣持の半ばは諦めに近いものであり、ただ「……憂き目を見むすらむ」とばかりで、自己の運命を好転せしめようとはせず、人生を逃避して嵯峨の山里にこもつたのだから、新時代のめざめた女性などというものではない、というのだつた。

私は、こちらの意見にそのまま賛成なのだが、一体どうしてこのような意見の対立が生まれるのか、その根本のところから考へて行く必要があるようである。

私は最後の反対意見の中で特に注意しなければならぬのは、祇王は強い女だなどといえない、なぜなら彼女は最後に諦めて仏道に入つてしまつたのだから、というところであると思う。これは出家遁世というものは元來消極的なものだという、一つの考へ方に基づいていることはいうまでもない。これは今日すべての人に全面的に支持されるかというに、そうは考へられない。一方には必ずや、出家遁世というものは決してそういうものではないという意見があつて、そこに相異なる意見の対立も生じるように思われる。そういえば一方では、祇王は自ら自己の運命を開拓し信仰に生きたのだから積極的な女だというが、信仰に生きるといふのがどうして積極的なのか、それは証明されていない。他方では、彼女は最後は仏道に身を投じたのだから決して積極的ではないという。ここでもそれがなぜ積極

的でないかは明らかでない。ただ何となく自明のこととされていただけである。いつてみれば出家遁世というものに對する現代人の認識の相違が「祇王」に對する意見の対立を生み、しかもそれがそのままになつているのである。

もちろん、出家遁世が問題になるというのは、祇王の出家遁世が問題になるのであつて、それは今日におけるわれわれの仏教に對する認識如何とは無關係のはずである。ところが今日の仏教—宗教生活が古い過去の出家遁世の伝統から切り離しては考へられないのと同様に、これら二つを切り離して考へることは不可能のようである。祇王の出家遁世、中世の仏教思想、平家物語の本質等々が論ぜられるに當つて、現代人の宗教觀が好むと好まざるとにかかわらず生きて働く。學問上の論考に際してはもともと忌むべき「主觀の相違」が蔽として存在するところに、われわれの問題の困難がある。

ある論者はさらに「祇王」について、これを讀んで意欲的な生への強い要求を感じ、彼女たちの出家遁世が決して哀れな感傷的な弱者の逃避としてのそれでもなければ、夢のような一種の幸福をあこがれ求めるところのそれでもなかつたことを知る、という。祇王にしろ仏にしろこの世の生活に對して一途な純情を持つていたと考へられる。それが無慚にもたたきのめされたとき、現世への意欲が一回転

して永世への意欲となつた。そこに何らの躊躇も渋滞もないひたむきの突進があつた。したがつて無常観とか末法思想とかいうものは、彼女たちに対して決して敗者の厭世観として働きかけたとみることはできないであらう。彼女たちは眞実の道に入り、愛憎を超えた絶対界に出入し、高脱清純な暖い人生を生き得たのである、という。また平家物語は哀憐の史詩としてははかなく弱く悲しい抒情に溢れているといわれるが、しかしその哀れな中に痛ましく人生を凝視しようとする心、雄々しく道を求め且つ生き抜こうとする心の動いていることも、決して見逃してはならないのではないか、という。

私はここに、それこそ主観的な言い方であるが、今日における宗教生活の意義はどうであるか、それは現実の人生からの消極的、感傷的逃避にすぎないのではないか、等々の疑問に意気込んで答える現代の宗教家の口吻に似たものを感じずにはいられない。今日宗教的生活に人生の最上の意義を見出だすという人が、その自己投影で過去の作品の中の出家遁世、宗教生活に極度の讚美を寄せるのは、当然なことではあるが、それが果して作品の正しい鑑賞であるかというに、それは甚だ疑問であると思うのである。こういう場合客観的証明はなかなか困難であるが、たとえ「何らの躊躇も渋滞もないひたむきの突進」というのは、

どうであらうか。それは作品の本文に即応し得るものであろうか。ともすれば人のことが恨めしく思われて、かく出家遁世はしていながら、往生の素懷を遂げられそうにもなく、今生も後生もなまじいに仕損じたような気がしたというような、作中の人物の人間味のある述懐などと読みくらべると、多少のずれがあるように思われる。

ある論者はまた、女性の生涯を蹂躪された祇王が、終に宗教に甦り、更に清盛の掌中の珠なる仏御前をもその手から奪つて、同じ修行の道にひき入れたことは、畢竟清盛に対する祇王の終局の勝利を物語るものであり、一面においては、宗教をば権力以上のものとする当代の時代思想の現われと見るべきである、という。

この場合、果して祇王は清盛に勝つたのであろうか。私にはこの勝つたというのが、前に掲げた見解の中の雄々しいとか積極的とかいうのもそうであると思うが、実は空想、観念の中のそれであつて反つて事実を誤るものであり、文芸作品の鑑賞に際しては避けなければならぬもののように思われる。早い話が、祇王の出家遁世が近ごろの言葉でレジスタンスといえるものであるかどうかを考えてみよう。レジスタンスであれば勝つということも考えられる。これはちよつと考えるとレジスタンスといたい気もする。しかしほんとうのところ「祇王」は、何らのレジスタンスをも

許されない人が辛うじて幻想の中に未来の幸福を空想したところの、宿命の悲劇であつたとみるべきではなからうか。

さらに例を変えて考えてみたいと思ふが、私としては平家物語の読者は、雄々しいとか、積極的とか、勝つたとかいう言葉に自ら酔うことをやめて、無常を觀じるという言葉の方であらわされる、いわば絶望的な状態にあつた中世人の悲劇を、直視する必要があると考へるのである。

三

「横笛」も「祇王」に劣らず有名である。いうまでもないが、これは小松殿の侍齋藤滝口時頼がその愛人である建礼門院の雑仕横笛との仲を裂かれ、無常を觀じて嵯峨に世を遁れ、さらに愛人の恋慕を避けて高野に入り、その愛人もやがて後を追うて出家するといふ、悲恋の物語である。

ここでも同じように意見の対立が予想される。すなわちその一つは、これを二人の若い男女が周囲の無理解からの幸福を奪われる、中世社会の悲劇であるとするのである。もう一つは、彼等が一時の幸福は失つたけれども、さらにその不幸をのりこえて（それを善知識として、などいわれるところである）より、以上の幸福を得た感激の物語であるとするのである。

私は前者を支持する。なぜなら、「主観の相違」ということになるかもしれないが、そのより、以上の幸福というのが前にものべたように、宗教的なあまりにも宗教的な立場から理解されたものであり、つまり幻想の中に求められた、というのがいけないなら、甚だしい現実否定の上に立つて無理に考へられたものとしか思われなからである。

これについては、次のような見解の空想的、現実否定的傾向が批判されねばならないと思ふ。

曰く、われわれは滝口の成らぬ恋に乙女心にも似た夢を追う哀れの涙をそそぐ。そして人にも告げず片山かげに隠れる男の跡を慕うて一目なりとも逢いたいと願う横笛の心根に同情する。それと共に、心強くも恋さし固めて逢おうともせぬ滝口の心にも共鳴する。愛欲に溺れた姿そのままでは、永久に生き得るものではない。電光石火に異ならぬ夢幻の世を捨て去るとき、やがて滝口が主筋の維盛に向かつて教えを説き得るだけの、別の光明界が開かれていつたのである、と。

ここですまず問題になるのは、愛欲に溺れた姿そのまま永久に生き得るものではないということが、何を意味するかである。文字通り愛欲に溺れた人がいて、それを諫めるためにこの言葉が発せられたというのであれば、それはわかる。それは一般的に人間の耽溺を戒める言葉として、十

分意味をもつ。しかしここで滝口と横笛との仲を、ただ愛欲に溺れたとだけで片づけるのは酷である。われわれとしてはむしろ、愛する二人の仲がなせ裂かれねばならなかつたかに、重大な関心を寄せる。その重大関心事を抜きにして、いわゆる愛憎を超えた絶対界の幸福が説かれるのである。その幸福は現実の不幸をのりこえたところの幸福というものではなく、ほんとうのところを無視して空想されたところの、非現実的な幸福であるにすぎない。それから、電光石火の夢幻の世というのはどうであらうか。これはわれわれの重大関心事である人間の愛情の問題を含めて、現実の一切を否定するものであつて、文字通りの現実否定主義である。たとえば「たかが女一人に心を奪われて」とか「もつと強く生きよ」とか「世の中というものは思うとおりにいくものではないよ」とかいう言葉が、たとえ今日の不幸な青年を励ます意味で発せられたにせよ、その精神として恋愛を否定するものであるごとく、この論者の、愛欲に溺れた姿のままでは永久に生きるものではないとか、電光石火の世の中とかいう言い方は、平家時代の青年の悲恋に同情しながら結局人間のもつ美しいものを無理に拒否し、平家物語そのものの中にある大切なものを見失うものであることを、否定し得ないと思うのである。

人間のもつ美しいものといへば、横笛が往生院をたずね

るあたりは誰もがいうようにすばらしい。「ころはぎさるぎ十日あまりのことなれば、梅津の里の春風によその匂ひもなつかしく云々」から「いかなる道心者も心弱くなりぬべし云々」とつづく一節は、けだし平家物語を通じて屈指の美文で、まさに哀切のかぎりを尽くすというところであるが、こういうところのいわゆる愛情の表現をどう理解すべきであらうか。早い話が、それは肯定されるために描かれたものであるか、それとも否定されるために描かれたものであるかというに、それは前者でなければならぬと思ふ。

決意を固めた滝口入道が、無情にも横笛を追い返すあたりで、私は例の有名な弘法大師空海のいわゆる禁戒を思い浮かべる。

……それれば女人はこれ万性の本、これを弘め門を継ぐ者なり。しかれども仏弟子に於て親交すれば、諸悪の根源、嗚々の本なり。是を以て六波羅密教に曰く、女人に親近すべからず、もし猶親近すれば善法皆尽く云々。しかれば則ち僧房のうちに居らしむべからず。もし要言あつて諸家の使至らば、外戸に立てて速かに返報して、これを返せ。時尅を廻らすを得ざれ云々。

ここには、修行者たるものは女性を近づけるな、用件があつてたずねて来ても早く追い返せという、厳然たる教訓

がある。われわれは「横笛」のごときものとこのようなものとを、どのように読み比べるべきかについて考えてみた。

私は、この空海の禁戒のごときものを、日本の過去における驚くべき女性蔑視—愛欲否定主義の、典型的なものとする。日本人がそれから解放されて精神の平常をとり返すために数百年、あるいはそれ以上を要したところの、偏見であるとする。この禁戒とわれわれの平家物語とをよみ比べるとき、この二つは相共に同一方向をめざすもののように見えて、実はその反対であることに気づく。私は思う、平家物語の「横笛」は、一人の青年武士が湧き起る心中の妄念を遂に排して、この禁戒の示す最後の悟道境に至る事情を物語るものであるかというに、そうでない。それは逆に、人間性の真実が決してこのような教訓では律し得ない事実を物語るものでなければならぬ。そこで男女の愛情は、それを超克して以て真実の道に至るべき向上の過程として否定的に描かれているか、それとも所詮やむを得ざる人間性の真実として肯定的に描かれているかというに、それは後者であるといわねばならない。一体過去の日本の青年たちが、ここに描かれたような道をどうして辿らねばならなかつたかというに、それはそういう道しかなかつたのである。封建の世には封建の倫理しか用意されていなか

つたのである。そして文芸は当時にあつては、恣をやめよ、諦めよ、すべてを夢幻と悟れという教えにはついに従い得ない、人間の真実の表現として意味をもつたのであり、われわれの平家物語はそのような意味で、まことに傑作なのである。

もちろん私は、あらゆる場合に自分とは反対の立場のあることを忘れるものではない。ここにも一口に言つて仏教的立場というべきものがあつて、いつてみれば今日なお空海の禁戒のごときもの、あるいはその精神という言葉でいあらわされるものを尊重し、時にはそのような過去における厳格なるものの失われつつあることを歎きもする気持から（実際さういう、今日のことばでいえば人間性否定の気持からでなければ、「横笛」の出来事があり得ないというところが、大切である）、平家物語に何を見るかというに、やはり人々の雄々しい勇猛心を見るという人のあり得るのを、如何ともしがたいと思う。それはさういう人たちが今日なおあまりにも仏教的であることから来るのであつて、その際「主観の相違」というのがどちらから言いたい言葉であるかは別として、やむを得ないことであると思う。